

寢屋親の中村貢氏(左)と、4人の寢屋子、(左から)橋本建君、西川長太君、浜口幸亮君、中村良紀君。橋本君と西川君は漁師の見習い中、浜口君と中村君は将来、島外での就職を考えている



# 「人と人とのつながり」を強め、 支え合う風習

report

「若衆宿」の伝統を引き継ぐ寢屋子制度

— 答志島答志地区 —

**地域が人を育て、人が地域を育てる、  
暮らし・生業を支える基盤**

かつて日本の農漁村には、一定の年齢に達した男子が集団生活を行い、社会性を養う「若衆宿」の風習が広くあった。この風習を今も受け継ぐのが、三重県鳥羽市の沖合に浮かぶ答志島（とうし）の答志地区だ。人口約1,400人の漁業のまちを訪ねた。

中学を卒業した同級の男子数名が、地区内の別の家に一室（寢屋ねや）を借り、そこで寢泊まりをするのがこの風習。食事や学業、仕事の時間以外は一緒に過ごす。その若者たちを「寢屋子」と言い、彼らに部屋を貸す地区の家主が「寢屋親」である。

答志町会長の浜崎靖導氏によると、「寢屋子は青年団を退団する25、26歳頃か、誰かが結婚した時点で解散しますが、その後は朋友会を結成して、冠婚葬祭や地域の行事など、節目節目で助け合う生涯の仲間になります」。

寢屋子の結婚式では寢屋親が必ず仲人を務め、その後も実の親子同様の関係が続くという。平成22年現在、答志地区での寢屋子は約10組。このうち、



「あの人になら子を預けても大丈夫、という信頼の厚い人が寢屋親を頼まれる。寢屋親も、自分が寢屋子として育ててもらったので、地域のために引き受けるという意識が強い」と答志町会長の浜崎氏。自身にも4人の寢屋子がいる



「自分たちが若い頃は上下関係が厳しくて、寢屋親も先輩も怖かった」と話す中村貢氏。以前は寢屋子になるのは家を継ぐ長男と決まっていたが、最近は次男がなる場合も珍しくないという



人口約1,400人の答志地区を眼下に望む。島内には、他に隣の「和具」、半農半漁の「桃取」と3集落があり、地域性が異なる。たとえば答志では長男が家を継ぐが、和具では長男は島外へ出て次男が家を継ぐ。現在、寝屋子が続いているのは答志地区だけ

### 問い合わせ先

答志町内会  
〒517-0002 三重県鳥羽市答志町16番地  
TEL:0599-37-2070

八幡神社は島の守護神。旧暦1月18日前後の3日間は答志地区最大の祭「神祭」が開催される。豊漁、海上安全を祈願する弓引神事のほか、演芸大会もあり、寝屋子単位で芝居をするのが恒例。祭を大事にする伝統が寝屋子存続の背景になっている



答志地区の集落に入ると、軒を寄せ合う家屋の間を細い路地が縦横に伸びている。個人宅の戸や壁に書かれたマルハチの印。これは家内安全を願った魔除けで、八幡神社の「八」の字。旧正月に行われる弓引神事に使われた炭で書かれたものだ

4年前に答志中学校を卒業した4名の若者の寝屋親になった中村貢氏宅を訪問した。土曜の午後8時前、寝屋子が次々と集まってきた。

「以前は毎晩集まったけど、最近は土日だけ。うちの寝屋子には島外で生活し始めた子もいて、全員集まるのは月に1回程度」と中村氏。寝屋子は、漁師の見習い中という西川長太君と橋本健君、それに鳥羽市内の高等専門学校に在学中の中村良紀君、今春から名古屋市内で下宿して大学へ通う浜口幸亮君の4名。彼らは「寝屋親の方が自分の親より相談しやすい」と口を揃える。漁師になるか、島を出るか。思い描く将来はそれぞれ異なるが、ここに集まると他愛のない話題で大いに盛り上がる。

「全員が結婚するまで、肩の荷が下りない」と苦笑する中村氏は、代々漁師を営む62歳。若い頃は、島内の年頃の娘さんの家に寝屋子仲間（仲間）と連れだつて遊びに行き、互いに気に入ると結婚というケースが多かったという。しかし最近、8〜9割が島外の女性と結婚する。世代の違い、時代の変化を感じることも多いそうだ。

寝屋子の存続理由については、漁業の担い手を確保する必要性や、厳しい海で命運をともにする仲間の連帯感を生み出すためと説明されることが多い。それに加え、今回、何人もの寝屋親から「地域への恩返し」という言葉を聞いた。それだけ寝屋子は答志地区の中で「人と人とのつながりを強固にする」風習として根付き、暮らし・生業を支える基盤となっている。答志地区の人々が寝屋子は「なくてはならないもの」と感じている限り、この風習は簡単に風化することはなさそうだ。

(文責・CEL編集室)

CEL

答志地区では労働人口の約8割が漁業従事者。夫婦単位の漁が主流で、「夫婦船」をよく見かける



路地で子どもが走り回り、町中が遊び場。都会ではあまり見かけなくなった風景だ。家族だけでなく地域が子育てを支えている。各家庭の子ども数も3人以上が普通だという

